

## 一般 B 日程 入学試験

### 学力特待生 入学試験 (B 日程)

#### 入学試験問題

## 国 語

### 注 意 事 項

1. 願書提出時に、この試験科目の受験を申請していない人は受験できません。
  2. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
  3. 解答は解答用紙の解答欄にマークしなさい。
  4. 解答用紙にある「マーク記入例」と「記入上の注意」をよく読みなさい。
  5. この問題冊子は、十六ページあります。
- 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

もう何年も前の中学校の国語の教科書に、ある年老いた国語学者の手になる印象的なエッセイが載っていた（あいにく、著者の名を思い出すことができない）。それは、こんな内容だった。

晩秋の一日、落葉松林を歩いていたとき、その黄色く色づいた葉があとからあとから雪のように降っては地上に散り敷く美しい光景に見とれて、しばし息をのんだままその場に立ちつくしていた。ところが、そのことをあるところに書こうとして、「落葉松の葉が……」と書き出したとたん、その光景をテキカクに形容する表現が見当たらずに、はたと筆が止まってしまった。

「散る」でも「降る」でも「落ちる」でもない。独特のゆったりとしたテンポで、しかも間断なく枝を離れては舞いおりる無数の落葉松の葉たちに包まれて、この国語学者は、さながらファンタジーの世界にはいり込んだような感興に打たれたのであろう。

おそらくこれは、たとえば静かに鳴り響くシンフォニーの音に全身を浸しているときの **I** によく似たものだったにちがいない。こういう経験はたしかに、それが新鮮で豊かな情感をかもすものであればあるほど、言葉で人に伝えることはなかなかできないものだ。

**A** 私は少なくとも、彼がこのような言葉の専門家らしい繊細さを示して「筆が止まった」と書いてくれたことで、経験と言葉との両方を大切にすることの人の姿勢に深い共感を感じた。そしてそのことにかえって、落葉松の葉の舞い落ちる美しい光景をありありと想像することができたのである。

**I** 語りにくいのは、じつは「美しい光景」だけではない。すべての個人的な経験<sup>①</sup>というものは、もともと本質的に「語りにくい」要素を抱えているのだ。一見ありふれた日常的な経験であっても、そのことは変わらない。経験をそのまま言葉に翻訳できると思っている人がいるとしたら、それは、言葉というものについてのおめでたい錯覚に陥っているにすぎないのである。

経験が語りにくくなかったら、文学などはこの世に存在理由をもたない。すぐれた作品を生み出すための血のにじむような努力や、しのぎを削る才能の角逐<sup>イ</sup>などは、みんな無駄だという理屈になってしまう。

経験はどうして語りにくいのだろうか。

前章で、「女性」とは何かについて定義しようとした言葉の多くが、男性のものにせよ女性のものにせよ、あるこっけいさを免れていないと述べた。それらは、自らの「女性」経験を現に生きている場所と、それについて語ろうとする「理性」の場所とが異なっていることを自覚しないこっけいさだと、私は言った。

「女性（男性）」経験の場所は、自分が「男性」または「女性」としてまさに相手とかかわっている場所である。そしてそのかわりを支えているのは「情緒性」だ。ところが、「女性（男性）」とは何かについて言語で **II** しようとする作業は、「男性」でも「女性」でもなく、抽象的な「人間」の場所に **テツタイ**<sup>ビ</sup>したところで行われる。

あらゆる経験も本当はこれと同じである。経験とは、自分の目の前で、自分とは無関係に何かがただ次々に起きている場に立ち会うことではない。それは、**I**、情緒など、およそ人間が人間であること自体を支えている心身の条件のすべてを通して、世界とあい関わることだ。

たとえば、あなたが、自分と一緒に生活している人、連れ合いでも両親でも兄弟姉妹でもいい。その人がどんな人であるかを、まったく知らない他人に言葉で説明しようと試みるとする。あなたはとてつもない困難を感じるだろう。

あなたは、「こんな顔をしていて、背丈はこれくらいで、歳はいくつで、何をやっていて、性格はこんなふうで、こんな癖があつて、よくこんなことを話題にして、こんな経験をできていて」などと、一生懸命言葉を尽くして相手に「その人」のことをわかってもらおうとするかもしれない。しかしいくらやっても、わかってもらつたという確信を得られないにちがいない。**X**、おそらく、五分間実際にその人に会ってもらうほうが、五時間かけて言葉で説明するよりもはるかに多くのものを相手に与えるだろう。

深くよく知っているとほもとともとそういうことなので、それは、社会的に通用しているレベルでの言語の説明力とほとんど **III** しているといつてもよい。深く自分がかかわっている対象ほど、うまく説明できない。それは、自分の **I** や情緒が、これまでのかかわりの経験そのものにいまも刺し貫かれているために、経験がほとんど身体化して、言葉で説

明する段階にまで自分の心身をもぎ離せないからである。

もちろん、何があり、何がどうしたという「事実」のレベルは、経験の大事な要素である。ジャーナリストイックな言語は、おおむねこのレベルに重点を置いている。しかし、子どもが書くまずい作文や日記の典型例として、「今日は何時に起きてご飯を食べ、学校に行つてから帰つて友だちと遊んで夕ご飯を食べてテレビを見てお風呂に入って寝ました」という表現がよく取り上げられるのは、この種の表現が、個人としての経験を何ごとも語っていないからである。

ウ、ある「事実」に立ち会う主体自身に何が起こっていたのかを軽視してしまう言葉は、経験を経験としてまったくすくい取れていないのだ。だからこそ文学は、この軽視を、生に対する許しがたい冒瀆<sup>ウ</sup>と感じ、経験の豊かさ<sup>B</sup>に拮抗する言語のソウシュツに挑むのである。

もっと生理的な I の領域に話をかぎってもいい。

エ、人は、ある「IV」の I それ自体を言葉で説明できないはずだ。あなたは「バラの香り」がどんな香りであるかを、相手の経験に訴えずに言葉で説明できるだろうか。

あなたは、それが快適な IV であるか不快な IV であるかについての判断を語ることができる。しかし、どんな香りであるかについては、いかなる確立された形容詞を用いることもできない。バラを嗅いだことのない子どもにそれを言葉でわからせようと思つたら、「おふろで使う石けんみたいな」というように、他の I 的経験に訴えるほかはない。相手が「石けん」を経験していなかったら、絶望的である。

「IV」はいちばん具体性が強く、抽象的な類型化が困難な I なので、例として最適なのだが、つきつめて考えてゆくと、じつは味覚も触覚も聴覚も視覚も同じである。すべて個人の I 経験は、それが他の人々にも共通しているという確信を基盤としなければ、どんな言葉による形容も不可能なのだ。「大きい」「小さい」といった、もっとも通用しやすい I 尺度を示す形容詞でさえ、経験の共通性についての確信を前提としてはじめてその意味が相手に伝わるのである。

(小浜逸郎『これからの幸福論』による。ただし、出題に際して、字句や表記の改変、段落の変更・省略などを施した箇所がある。)

問一

傍線部ア～ウの漢字の読みとしてもっとも適切なものを、解答群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

(解答番号 ア 1、イ 2、ウ 3)

- |   |    |     |      |     |       |     |      |     |       |     |      |
|---|----|-----|------|-----|-------|-----|------|-----|-------|-----|------|
| ア | 感興 | [1] | かんこう | [2] | かんしょう | [3] | かんあつ | [4] | かんきよう | [5] | かんてき |
| イ | 角逐 | [1] | かくとつ | [2] | かくてつ  | [3] | すみちく | [4] | すみてつ  | [5] | かくちく |
| ウ | 冒瀆 | [1] | ぼうばい | [2] | ぼうかん  | [3] | ぼうとく | [4] | ぼうどく  | [5] | ぼうはん |

問二

傍線部 a～c の片仮名の太字箇所を用いる漢字としてもっとも適切なものを、解答群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

(解答番号 a 4、b 5、c 6)

- |   |       |     |   |     |   |     |   |     |   |     |   |
|---|-------|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|
| a | テキカク  | [1] | 滴 | [2] | 的 | [3] | 摘 | [4] | 敵 | [5] | 擢 |
| b | テツタイ  | [1] | 徹 | [2] | 哲 | [3] | 撤 | [4] | 迭 | [5] | 鉄 |
| c | ソウシュツ | [1] | 想 | [2] | 奏 | [3] | 総 | [4] | 創 | [5] | 送 |

問三

I、IV に入るものとしてもっとも適切なものを、解答群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

(解答番号 I 7、II 8、III 9、IV 10)

- |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| I   | [1] | 精神  | [2] | 振動  | [3] | 直観  | [4] | 感覚  | [5] | 味覚  |
| II  | [1] | 現実化 | [2] | 立体化 | [3] | 理想化 | [4] | 対象化 | [5] | 形骸化 |
| III | [1] | 比例  | [2] | 反比例 | [3] | 関連  | [4] | 上昇  | [5] | 下降  |
| IV  | [1] | 味   | [2] | 音   | [3] | 手触り | [4] | 匂い  | [5] | 美しさ |

問四

傍線部A・Bの意味としてもっとも適切なものを、解答群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

(解答番号

A ||

11

、 B ||

12

)

A 息をのんだままその場に立ちつくしていた

[1] 途方に暮れて、動けなくなること

[2] 頭が真っ白になり、動けなくなること

[3] 解決する手段が思い浮かばず、その場に立ち止まること

[4] 感動して、しばらくその場に立ったままであること

B 拮抗する

[1] 比べてみて見劣りせず、同程度であること

[2] 優劣がつかず、お互いに張り合うこと

[3] 一方の力が勝っており、一方が抵抗すること

[4] 価値や能力が同程度であること

問五

ア く エ に入る接続語の組み合わせでもっとも適切なものを、解答群の中から一つ選びなさい。

(解答番号

13

)

[1] ア だから イ けれど ウ たとえば エ たとえば

[2] ア けれど イ だが ウ このように エ たとえば

[3] ア そして イ けれど ウ そのうえ エ しかしながら

[4] ア けれど イ そして ウ しかし エ このように

問六

X に入ることわざとしてもっとも適切なものを、解答群の中から一つ選びなさい。

(解答番号

14

)

- [1] 案ずるより生むが易し
- [2] 果報は寝て待て
- [3] 百聞は一見に如かず
- [4] 暖簾に腕押し
- [5] 二足のわらじをはく

問七

本文の内容と合致しないものとしてもっとも適切なものを、解答群の中から一つ選びなさい。

(解答番号

15

)

- [1] ありふれた日常的な経験なら、そのまま言葉に翻訳できるという思いは、おめでたい錯覚であるといえる。
- [2] すぐれた作品を生み出すための努力や、しのぎを削る才能の角逐などは、何がどうしたという「事実」を正確に記述することに向けて行われている。
- [3] 子どもの書くまずい作文や日記の典型例として取り上げられる表現は、経験が経験として全くすくい取られておらず、個人としての経験を何事も語っていない。
- [4] ジャーナリスティックな言語は、「事実」のレベルに重点を置いている。また、それは、経験の大事な要素にもなっている。
- [5] 筆者は、美しい光景を目の当たりにして、みだりに言葉にしない国語学者の姿勢に深く共感するとともに、経験の語りにくさが逆に文学の存在理由になると考えている。

問八

破線部①「すべての個人的な経験というものは、もともと本質的に「語りにくい」要素を抱えている」理由としてもっとも適切なものを、解答群の中から一つ選びなさい。

(解答番号

16

)

[1] 経験というのは、自分と無関係に何かただ次々と起きている場面に立ち会うことであり、人間の心身の条件のすべてを通して、世界とあい交わることであるから。

[2] 経験は、これまでのかかわりにおいて自分の感じ方の経験そのものに刺し貫かれているため、身体化していて、言葉で説明する段階にまで心身をもぎ離せないから。

[3] 自分が経験し深くかかわると、物事の裏側がわかりすぎて、うまく説明できなくなるから。

[4] 「事実」のレベルは、経験の大事な要素である。そこで、事実を羅列していけば、個人としての経験を語っていることになるから。

[5] 一人一人の経験は異なるため、共通性がない経験については、確信をもって伝えていくことが重要であるから。

問九 詩集「水墨集」に収録された落葉松をうたった作品や、歌集「桐の花」、童謡「からたちの花」などの作品によって知られる詩人は誰か。解答群の中から一つ選びなさい。

(解答番号 17)

- [1] 与謝野晶子
- [2] 北原白秋
- [3] 島崎藤村
- [4] 石川啄木
- [5] 野口雨情

問十 ことわざ・慣用句の空欄 ① く ⑤ に入るものとしてもっとも適切なものを、解答群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

(解答番号 ① || 18、② || 19、③ || 20、④ || 21、⑤ || 22)

① が早い



② を折る

弱り ③ にたたり

③

④ をまるめる

⑤ に泥をぬる

[1] 頭 [2] 鼻 [3] 目 [4] 顔 [5] 耳

問十一 次の漢字の組み合わせでもっとも適切なものを、解答群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

(解答番号

あ ||

23

、い ||

24

)

あ カンシヨウ

① 名月を **カンシヨウ** する。

② 趣味は映画 **カンシヨウ** だ。

③ 内政に **カンシヨウ** する。

④ **カンシヨウ** 的な気分になる。

[1] ① 観賞 ② 鑑賞 ③ 感賞 ④ 感照

[2] ① 鑑賞 ② 観賞 ③ 干涉 ④ 感傷

[3] ① 観賞 ② 鑑賞 ③ 干涉 ④ 感傷

[4] ① 鑑賞 ② 勸奨 ③ 完勝 ④ 感賞

い イギ

① 同音 **イギ** 語を見つける。

② 会議で **イギ** を唱える。

③ **イギ** のある研修会に参加する。

④ **イギ** を正す。

[4]	[3]	[2]	[1]
①	①	①	①
異義	意義	異議	意義
②	②	②	②
異議	異議	異義	異議
③	③	③	③
意義	意義	意義	威儀
④	④	④	④
威儀	威儀	伊儀	異義

二  
一  
次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

昔、淳和天皇の御時、五条の左大臣高藤とて、容顔ことに美麗に、才学いみじきのみならず、四方に四万の蔵を建て、なにはにつけて、乏しきことおはしませず。されども、人間の思ひ尽きせぬならひとて、五十に余らせ給ふまで、一人の孝子おはしませず。

つくづく案じ給ふに、われ、先の世に、いかなる罪をつくりてか、現在に、子といふことのなかるらん、百年の齢を保つとも、つひにはとどまるべき世にあらず、なからん跡をも、誰か弔ふべき、古今に至るまで、神仏に申すことかなへばこそ、さるためしもあるらんとて、清水に参り、一七日籠り、五体を地につけて、三千三百三十三度の礼拝を奉りて、「一人の孝子を、男子にても女子にてもたび給へ」とて、種々の願をぞ立てられける。「もしこの願成就せば、花の御ちやうたい、金銀にて、三十三面づつ、毎月に、三年かけて参らすべし。毎月、万灯を三年とほして参らすべし。錦の御帳、七重づつ、三年かけて参らすべし。百人の僧を集めて、法華三味の不断経を、三歳読ませて参らすべし。金泥の観音経、三千三百三巻書かせて参らすべし」と、かやうに種々の願を立てられける。

七日に満ずる暁、いとつけたたる御声にて、「こなたへ」とぞ召されける。方丈なる所に、香の衣、同じ袈裟かけて、いとかうばしき老僧おはします。かの浄名居士の方丈の間に、三万六千の床を並べけるも、思ひ知られて、いと尊くもありけり。いづくに立ちたるべしとも覚えず。高僧重ねて、「それへそれへ」と召されけり。御前にかしこまり給ふに、「やあ、なんちが申すところの孝子、かなへ候ふべし」とて、磨ける玉を一つ取り出し給ふ。すなはち、大臣殿の左の袖に移ると思ひて、夢はさめにけり。その後、程なく、北の政所は、ただならずなり給ふ。程なく、若君一人出でき給ふ。御名をば、玉若殿とぞ申しける。

日々に、成人し給ひて、父の大臣殿、一時も御身を離さず、かしづき給ふ。五歳と申す時、内裏へ御参内ありけるに、具足奉り給ふ。帝王聞こしめして、「いまだ例もなきことなり。七歳の童殿上といふことあれども、五歳の昇殿は珍しきなり。さりながら、高藤が子のことなれば」、君も寵愛し給ひける。すなはち、「除目を始めよ」とて、左小弁、除目あり。四位のしうになし奉り、公卿の座へぞ召されける。昇殿の初めに、しるしなくてはいかがあるべきとて、但馬、丹後の両国を

給はりける。大臣殿、いよいよつきかしづき給ひけり。やうやう六つ七つにもなり給ふ。余の人に超えて、才学ことにおはしけり。笛を吹き給ふ。

さる程に、母の北の方、無常の風に誘はれて、朝の露と消え給ふ。大臣殿は、ただこの若君に慰みて、明し暮し給ふ。十三と申す春の頃、大臣殿もかくれ給ふ。侍従の君の御歎き、申すはかりもなかりける。父の御孝養のためにとて、十町の床をかかせて、七日の間、笛をぞ吹き給ふ。梵天、帝釈、四ひやう、四ろくとうの、かうたいのかくに手向けて、一心に、「父の後生を助け給へ」と祈られけり。七日と申す午の時ばかりに、紫雲たなびき、天降るを見れば、天衆童子十六人、玉の輿をかき、玉の冠、金の輿を肩にかけて、ゆゆしき官人天降り、侍従に向ひて、涙を流し、「なんぢ、七日の間、吹くところの笛、すなはち、梵天国に通じ、孝行の志、二つなきを、上は上品上生、下は竜神かいほんまでも、納受し給ふなり。われ、一人の姫を持つ、なんぢに取らすべし。来る十八日に、床を清め、香を焚き、なりをしづめて、笛を吹いて待ち給へ。われこそ梵天王にて侍る」とて、紫の雲にたち隠れ上り給ふ。侍従は、夢現とも定かならずして、床より下り給ひて、持仏堂にて法華經の紐を解き読み給ひける。この御経をば、また母の御菩提のためとぞ祈り給ひける。

(『橋立の本地』による。ただし、出題に際して、字句や表記の改変・削除などを施した箇所がある。)

【注】孝子…孝行な子。

先の世…この世に生まれてくる前の世。

神仏に申す…神仏に願うこと。

万灯…仏前にもす多くの灯火。

不断経…一定の期間に、昼夜とぎれることなく経を誦すること。

具足…連れ従えること。

除目…大臣以外の諸臣を官職に任命する儀式。

はかり…限り、限度の意。

孝養…親の後世を弔うこと。

後生…後の世、来世。

天衆童子…天上界の童子。

納受…神が人の願いなどを聞き入れること。

菩提…仏果を得て、極樂に浄土すること。

問一

波線部 a、b を文法的に説明したものとしてみっとも適切なものを、解答群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。  
同じものを繰り返し用いてもよい。

(解答番号

a ||

、 b ||

)

[1] 断定の助動詞「なり」の終止形。

[2] 断定の助動詞「なり」の連用形。

[3] 伝聞推定の助動詞「なり」の終止形。

[4] 伝聞推定の助動詞「なり」の連用形。

[5] ナリ活用形容動詞の終止形活用語尾。

[6] ラ行四段活用動詞「なる」の終止形。

[7] ラ行四段活用動詞「なる」の連用形。

問二

波線部 A、B の敬語についての説明として、もっとも適切なものを、解答群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。同じものを繰り返し用いてもよい。

(解答番号

A ||

、 B ||

)

[1] 尊敬の本動詞で、作者から梵天王への敬意。

- [2] 尊敬の本動詞で、侍従から梵天王への敬意。
- [3] 尊敬の補助動詞で、侍従から梵天王への敬意。
- [4] 尊敬の補助動詞で、梵天王から侍従への敬意。
- [5] 謙譲の本動詞で、大臣から帝王への敬意。
- [6] 謙譲の本動詞で、帝王から大臣への敬意。
- [7] 尊敬の本動詞で、作者から大臣への敬意。
- [8] 尊敬の本動詞で、作者から帝王への敬意。

問三

二重傍線部「午の時」の時刻として、もっとも適切なものを、解答群の中から一つ選びなさい。

(解答番号

)

- [1] 四時
- [2] 八時
- [3] 十二時
- [4] 十六時
- [5] 二十時
- [6] 二十四時

問四

傍線部①、②の解釈として、もっとも適切なものを、解答群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

(解答番号

① ||

② ||

)

① されども、人間の思ひ尽きせぬならひ

- [1] 容貌に恵まれ、学問にもすぐれ、裕福であっても、苦い思い出がないわけではないこと。
- [2] 容貌に恵まれ、学問にもすぐれ、裕福であっても、悩みがなくなってしまうことはないこと。
- [3] 容貌に恵まれ、学問にもすぐれ、裕福であっても、恋人がいなくなることはないこと。
- [4] 容貌に恵まれ、学問にもすぐれ、裕福であるので、悩むことをしなくなってしまうということ。
- [5] 容貌に恵まれ、学問にもすぐれ、裕福であるので、悩まないように気を付けているということ。

② いづくに立ちたるべしとも覚えず

- [1] どこに立っていたのか覚えていない。
- [2] どこに立っていたらよいかわからない。
- [3] どのくらい立っていたのか覚えていない。
- [4] どのくらい立っていたらよいかわからない。
- [5] どのくらい立っていないかわからない。

問五

破線部 i、ii と同じ人物として、もっとも適切なものを、解答群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

(解答番号

i ||

32

、 ii ||

33

)

- [1] 左小弁
- [2] 大臣
- [3] 北の方
- [4] 玉若殿
- [5] 高僧
- [6] 梵天王
- [7] 帝王

問六

傍線部 I のように願った理由としてもっとも適切なものを、解答群の中から一つ選びなさい。

(解答番号

34

)

- [1] 子どもがいなかったら、自分の死後を弔ってくれる人がいないから。
- [2] 子どもがいなかったら、大臣であっても周囲の人から認めてもらえないから。
- [3] 子どもはいたが、幼くして亡くなってしまい、現在はいないから。
- [4] 子どもはいたが、成人して家を出て行ってしまい、寂しかったから。
- [5] 子どもはいたが、あまり孝行な子ではなく、様々な苦勞をしたから。

問七

傍線部 II と同じ意味を表す本文中の文として、もっとも適切なものを、解答群の中から一つ選びなさい。

(解答番号

35

)

[1] 夢はさめにけり

[2] ただならずなり給ふ

[3] かしづき給ふ

[4] 朝の露と消え給ふ

[5] 隠れ上り給ふ

問八

傍線部Ⅲの涙に込められた思いとして、もつとも適切なものを、解答群の中から一つ選びなさい。

(解答番号

36

)

[1] 父の来世のため笛を吹き続けたことに感動する気持ち。

[2] 侍従が吹いた笛の素晴らしさに感動する気持ち。

[3] 七日間、笛を吹き続けた侍従の技術に感服する気持ち。

[4] 侍従のつらい境遇を思い、今後を心配する気持ち。

[5] 父を亡くして悲しむ侍従を気の毒に思う気持ち。

問九

鎌倉・室町時代の説話について説明をした次の文の括弧に当てはまるものとして、もつとも適切なものを、解答群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。なお、文章中の『 』には作品名が、( )には人名や用語が入る。

(解答番号

ア||

37

、イ||

38

)



鎌倉・室町時代には、仏教信仰が高まりを見せ、数多くの仏教説話集が誕生した。(ア)の『発心集』や無住の『イ』などがある。

- |     |     |     |       |     |     |     |     |      |       |
|-----|-----|-----|-------|-----|-----|-----|-----|------|-------|
| [1] | 鴨長明 | [2] | 兼好法師  | [3] | 橘季成 | [4] | 慈円  | [5]  | 宗祇    |
| [6] | 十訓抄 | [7] | 古今著聞集 | [8] | 沙石集 | [9] | 愚管抄 | [10] | 今昔物語集 |